

学校再編にかかる活動状況

今後の学校再編に向けた取り組み状況

白川町新しい学校づくり検討委員会の開催

委員会設置の目的

- ・「白川町立小・中学校一貫教育の基本構想」の具現に向け、より詳細かつ具体的な白川町の新しい学校づくり計画を検討する。

所掌事項

基本構想に示した義務教育学校「美濃白川学園」の創設に向け、次に掲げる事項について情報を収集し、検討及び協議する。

- (1) 小・中学校一貫教育におけるカリキュラム及び指導体制等に関すること
- (2) 施設一体型小・中学校の校舎の施設計画及び設備等に関すること
- (3) 地域との連携体制の強化に関すること
- (4) その他委員会の目的を達成するために必要なこと

委員構成

- ・委員長の岐阜大学教職大学院名誉教授・石川英志先生をはじめ、町内小中学校の校長及び教職員による委員8人。
- ・上記委員のほか、委員会での議事に必要な情報・資料の提供者として、可茂教育事務所教育支援課の職員に出席いただいている。

令和5年度の協議状況

第3回委員会 令和5年5月22日

○議事

- (1) 白川町立小・中学校一貫教育の基本構想の概要について
- (2) 町内各小・中学校のふるさと白川町を基盤とした教育活動の今後の展開のあり方について
- (3) 白川町立施設一体型小・中学校建設に向けた動きについて
- (4) 新しい学校づくり検討委員会の今後のあり方について

○議事「町内各小・中学校のふるさと白川町を基盤とした教育活動の今後の展開のあり方について」で出されたポイントとなる意見 ※委員長のコメントを含む

- ・カリキュラム開発というのは、「あるものを捨てて、あるものを取り上げる」というものではなく、「どのようにつなげていくか」が大切
- ・(町内小・中学校で行われている白川町を基盤とした教育活動を見渡し)「学年を超えて、異学年と共同でやっていけるものはないか」とか、「内容的に発展性はどうか」とか「教科とのつながり」とかについて、考えていくことが大切
- ・今日、「資質能力の育成」とよくいわれるが、それは個々の領域で閉じているものではなく、各校のふるさと教育活動で学んだことが、教科で学んだことと、どのようにつながっていくのかなどについて考えていくことが大切
- ・各校の取組が、単に「行事」とか「イベント」というものを超越し、子どもを育てていく活動として発展していく可能性を、どう引き出していくかなどについて議論していくことが、実は「カリキュラムを作っていく」ということである
- ・3小1中体制になった時点でのカリキュラムを作成するにあたり、「ふるさと白川町を基盤とした教育活動」のゴールをあらかじめ定めて進んでいくのではなく、(過去に取組んできた「財産」を見落とさないようにするため) 過去・現在と取り組んできたことを整理・検証しながら、目標を構築していく手法をとることになっている
↓そして
- ・ある時点で子どもと協働して目標を定め、それに向けて探究する流れとする

○議事「白川町立施設一体型小・中学校建設に向けた動きについて」で出されたポイントとなる意見 ※委員長のコメントを含む

- ・ハードの視点から議論されることが多い学校の建築計画であるが、それらにはソフトとしての学校の在り方、カリキュラムに関わる理念と密接に結びつけて考えることが重要である
- ・異学年交流の空間や、子どもたちの居場所づくりなど、一見ハードの課題のように思えるが、「白川町立小・中学校一貫教育の基本構想」や、現在議論しているカリキュラム論とのつながりの中で考えなくてはいけない

- ・「地域住民との交流活動など、多様な放課後活動等に対応できる機能」が新しい校舎に盛り込まれることになっているが、新しい校舎づくりにおいて、先生と子どもたちの縦の関係ばかりでなく、地域住民との斜め関係を視野に入れた検討が必要
- ・校舎といえば「教室と職員室でつくられているもの」というイメージを抱きやすいが、子どもの視点で考えてみると、職員室と教室だけでは、居場所がなくなってしまう場合がある
- ・もっと中間的な、子どもが気軽に相談したり、子ども同士の小グループで集まったりする場とか、フリーアドレスの職員室などを整備するなど、ハード面を変えていくと、それが必然的にソフト面にも影響してくるため、「ソフトとハードを総合的に考える」ことを、念頭に置きながら検討していく必要がある
- ・「だれもが使いやすいインクルーシブな学校」であるためには、どの子どもにも居場所があるということが大切である
- ・先生同士も協働ができる学校文化をどう作っていくか、それを支えるようなハード面の検討は重要。

第4回委員会 令和5年7月24日

○議事

- (1) 「3小1中体制での教育課程」に関するブレインストーミング
- (2) 「部活動のこれから」に関するブレインストーミング

○議事「『3小1中体制での教育課程』に関するブレインストーミング」で出されたポイントとなる意見 ※委員長のコメントを含む

- ・白川中が、黒川中と統合したのならば、これまで自分たちの校区になかった文化を、新しい自分たちの文化、白川町の文化として発信していくことが可能になる
- ・白川中の総合的な学習は、佐見中との学校統合を機に、学年ごとに地域やテーマを設定して問題解決型の学習を行っている
- ・黒川中は、1年生で太鼓演奏、2年生で歌舞伎上演、3年生で三味線演奏を文化祭で披露するための技能の習得が中心になり、探求的な要素は乏しい

- ・佐見小学校には、子どもたちに学ばせたい地域の教材がたくさんあり、児童数が減少していくなか、これ以上、地歌舞伎の練習に授業時数を使っていいものか、悩んでいるところである
- ・白川町全体で、各地域の子どもたちの学びのためのコンテンツについて検証し、それに子どもたちや地域の人たちたちがどのように関与していくかについて、考え直す時期に差し掛かっていると思われる
 - ↓これは
- ・カリキュラム開発だけの問題でなく、地域全体、白川町全体の問題でもある
- ・地区ごとで、伝統文化に対する意識の開きが大きいことも考えながら、教育課程を編成することが大切である
- ・3小1中を視野に入れながら、各地の状況を踏まえて、学校側から、地域との連携、地域との関わりをどのように仕組んでいき、どう展開すべきか、あるいは、子どもたちの当事者意識を、どう育てていくべきかを、考えていかねばならない
- ・小学校では、当事者として体験によって学び、中学校になると他の地区から生徒が集まってくるため、客観的に、いろいろな視点から見ることができるようになる
- ・今まで当たり前だと思ってきたことを、ほかの子の視点で、問い直してみるとか、多面的に見るとかできるようになる。そこから、地域の課題とか、「こうしてみれば」などといった考えが、出てくるようになる
- ・中学校段階では、お茶づくりなどを体験させるだけで、「白川茶はいいね」って終わるのでなく、持続可能なまちにしていくために、「白川茶をとりまく課題は何なのか」と考え、課題や問題点を見出し、その解決法を共に考えていくような活動が仕組みないかと考えている
- ・小学校段階で、地域のよさを体験して知っているからこそ、中学校段階では、これから持続発展させていくために、課題や問題点を見出し、それを解決するためには何ができるのかを発信できるようにする
- ・子どもたちが、ほんとうに誇りを感じて、白川町に残していきたいと思うものは、子どもによってそれぞれであるので、歌舞伎に関しても、お茶に関しても、子どもたちへの押し付けになってはいけないと考えている

- ・今いる大人たちからの押し付けと感じないように、子どもたちがいきいきと、白川町の未来について考えられるような、教育をしていく必要があると考えている
- ・黒川中のすべての生徒が歌舞伎に対して関心が強いわけではない。
↓
- ・黒川中としても、探求的な学習の要素を取り入れたいところもあり、中学生にふさわしい学びの在り方を検証すべき、過渡期に来ていると考えている
- ・伝統文化の継承が、私たちの行っている学校教育活動の目的ではない
↓
- ・子どもたちが「どう生きるか」ということを学習するためのコンテンツとして捉える必要がある
↓このことをめぐって
- ・地域の方と議論して、見解の相違が生じることは、当然ありうることで、そういった場合には、じっくりと議論を詰めていくことが大切である
- ・好きなことには、とても大きな力を発揮する生徒たちの様子を見てみると、その生徒がやりたいことを、深く学ばせることが、キャリアデザインや、他の教科をもっと学びたいと思うようになるインセンティブにつながると考えられる
↓したがって
- ・全生徒が同じ教材で学ぶというのではなく、選択制で学べるようにすることがよい
↓
- ・個々の生徒のそういった学びを太らせていく、そこにその子らしさとか、その子の可能性を見出していき、そのようなカリキュラムを中学校の中で位置づけたい
↓
- ・教師のほうで、方向性をしっかりと予測して、作りこんでしまうのではなく、子どもたちがどんなふうに方向性を出してくるのか任してみるのもよい
↓もちろん
- ・そういった子どもたちの探究を支える、教師側の準備は必要
↓そのうえで
- ・子どもたちがどう動いていくか、子ども同士で相談したり、教師も一緒になって考えたりといった、カリキュラムにおける空白のようなものをあえて作っていくことも大切だと考えられる
↓それは
- ・隅々まで教師の意図をいきわたらせるようなカリキュラムではない

第5回委員会 令和5年9月20日

○議事 白川町の新しい小中一貫教育に適合し

児童数生徒数の減少に柔軟に対応できる学び舎

第6回委員会 令和5年11月20日

○議事 9年間の子どもの学び・成長を支える学び舎のあり方

第7回委員会 令和6年1月22日

○議事 児童生徒、教職員、地域にとって、魅力あふれる学び舎を目指して

○第5回～7回の委員会で出されたポイントとなる意見 ※委員長のコメントを含む

- ・児童・生徒数の減少に伴う、クラス数及びクラス規模の減少に柔軟に対応し、地域住民との交流が促進される校舎とするため、将来的に町立図書館「楽集館」を設置できる設計とする

↓

- ・従来のライブラリーという発想でなく、いろいろと調べることができる図書館や、ミュージアム的な要素を取り入れたりした図書館をめざし、学校図書室と特別教室エリア(将来的に「楽集館」となるエリア)を「白川ミュージアム」として整備する

- ・小中一貫教育校、さらにいずれ義務教育学校となることを見通して、そのよさが発揮できるようなインクルーシブ教育をどう展開するか、それを支えるに相応しいハード面(建築や生活学習環境)を、議論し掘り下げておくことがこれから必要

↓

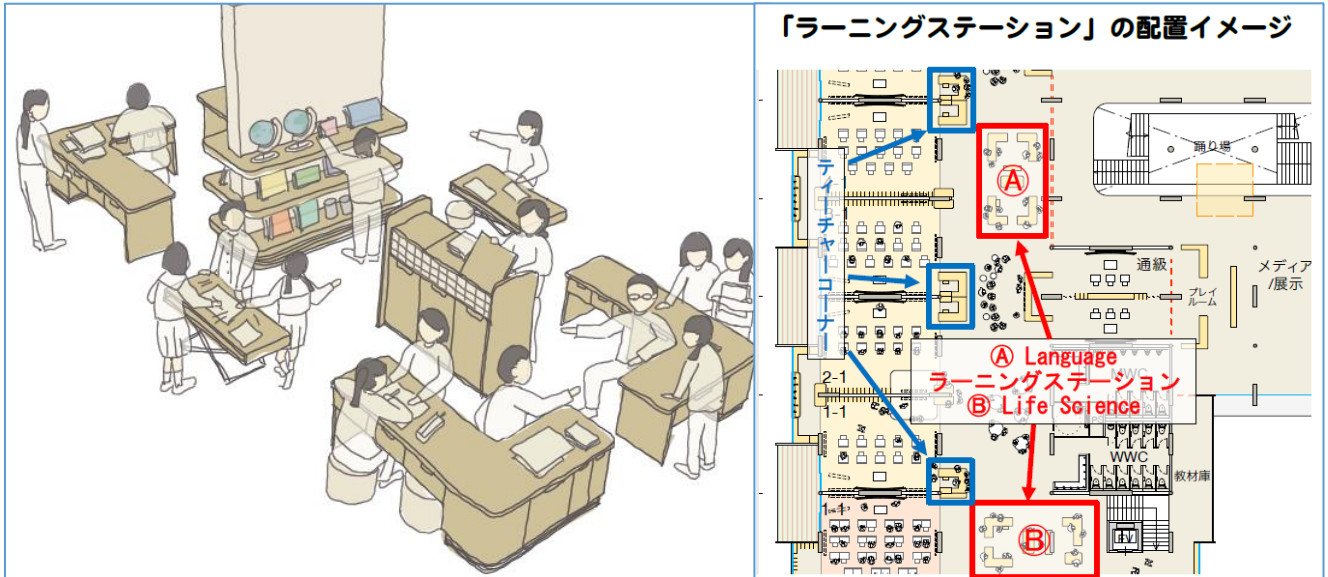
- ・特別支援教室やそれに連続する周辺空間を、従来の延長線上にイメージするのではなく、一人ひとりの発達状況に応じた柔軟で可動的な教室空間、移動しやすい教室間連携、また施設一体型小・中学校(将来的に義務教育学校)ならではの多様なコラボやつながり、働きかけあいが、子どもたちのなかで自然と生まれてくるような、開放的で共用可能なスペース(コーナースペースとか)を設けることなどが大切

↓

- ・普通学級の中学生たちが、特別支援学級や普通学級の低学年の子どもたちにアプローチして、面倒をみてあげたりするのは、教育的意義があるといえる

「ラーニングステーション」のイメージ

- ① 物 机、いす、書棚、掲示板がある
 - ② 人 教師、子ども（児童生徒）がいる
 - ③ 媒体 書籍、ポスター展示、立体の作品や教材がある
- ラーニングステーションにとどまり、「物」「人」「媒体」の間で、相互作用が起こる場



- ・ラーニングステーションは、教科や小・中学校の枠を超えた学びのための、小中の子どもたち及び教師たちの交流と協働の場である

↓さらに

- ・「言語」（国語・日本語、外国語など）及び「生活科学」（数学、社会、保健など）の枠組のもと、既存教科を地域の現況や歴史と関連付けて具体的に構成し、今後小中一貫教育の柱となる「美濃白川学」につながるコンテンツをめぐる小中の子ども、教師たちの、交流や協働を支援する場所をめざす

↓また

- ・「言語」及び「生活科学」にとどまらず、それ以外の教科の系統性や学び直しに対応した小学校と中学校の教師連携による教材開発を進めるといったことも視野に入れて、白川町の地域に相応しいカリキュラム・マネジメントの展開が期待される
- ・小学校と中学校それぞれ別個に考えて、それを接着するといったイメージを越えて、小学校でもない中学校でもない小中一貫校さらに義務教育学校を視野に入れていくと、教師サイドの意識改革がいろいろな方面にわたって必要になる

- ・ソフト面とハード面の相互往還の議論が不可欠
- ・校舎内の子どもが使える生活・学びの空間として、教室、特別支援教室、特別教室とは別に、「子どもたちが自分自身で気分の切り替えができる小さな空間、居場所」という別の選択肢スペースがあってもよい（空間は限られたものなので、模様替え可能なものとして整備）
- ・文科省の方針のもとに各県で「学びの多様化学校」が、設置されているが、「学校」丸ごと設置というよりも、今後を見すえて、どの学校でもそれぞれの学校のなかに、「学びの多様化教室」「学びの多様化スペース」「一息つける安心わくわくスペース」といったようなものが、たとえ狭くあっても設定可能なように準備できるとよい

学校再編にかかる保護者説明会の実施



- | | |
|----------------------|-----------------|
| 10月28日(土)…黒川小学校 | 10月28日(土)…黒川中学校 |
| 11月2日(木)…光の子保育園 | 11月7日(火)…黒川保育園 |
| 12月1日(金)…蘇原小学校 | 12月5日(火)…白川小学校 |
| 12月5日(火)…佐見小学校・佐見保育園 | |
| 2月20日(月)…白川中学校 | 2月27日(火)…蘇原保育園 |
| 3月1日(金)…白川保育園・白川北保育園 | |

○PTA行事の折に20分ほどの説明、意見交流ができる時間のごく限られていたが、会場で出された意見及び説明会后にメール等で寄せられた主な意見は以下のとおり（佐見保育園・小学校保護者対象については夜間に実施）

- ・複式学級ができる前に、学校統合と校舎建設を進めてほしい
- ・財政面の心配があるが、国や県は、学校の建設に対してもっと支援をすべき
- ・地域が衰退するから学校統合に反対
- ・計画的に学校間の交流により行い親交を深めて、学校統合による環境の変化によるストレスを少しでも軽減してほしい。
- ・人口が減るから学校を統合するのではなく、教育委員会だけでなく、町全体で人口減少を回避する取り組みをすべき
- ・「中学校が無くなる」という見方をすれば寂しい限りだが、子どもたちのことを考えれば再編成することには賛成
- ・中学生と小学生低学年が一緒の学び舎で過ごすのは、危険なこともあるのではないか
- ・2つの中学校が統合すると部活動の種類を増やす（復活）ことができるのか
- ・施設一体型小・中学校や義務教育学校では、6年生が幼いままにならないのか

学校再編にかかる地域説明会・懇談会の実施

黒川地区（黒川地区の自治協議会主催）

○開催日と参加人数

11月25日(土)…21人	11月26日(日)…14人、	
12月2日(土)…22人	12月3日(日)…25人	合計82人

○自治協議会が設定した4つのテーマで、保護者とその他地域住民の小グループに別れ意見交換を行ったため、町側の説明は十分にできていない

○テーマごとの主な意見の概要は以下のとおり

①黒川の学校教育に対する受け止め方

- ⑩ 少規模だからきめ細かい教育が実施されている
- ⑩ 少人数のため学校行事や部活などでの制約が多い
- ⑨ 地域と大人の関わり合いが深い
- ⑨ 高校に進学したとき大勢の子たちになじめるのか心配

※黒川の学校教育を好意的に受け止めているが、必ずしも他の学校と比較し分析した意見にはなっていない

②中学校が統合した後の黒川地区はどうかと思う

- ⑩ 交友関係が広がる ・部活の選択が増える
- ⑩ 自転車などで通学する子どもの姿がなくなりさみしい
- ⑨ 子どもにとっては刺激が増えてよい
- ⑨ 地域の活気がなくなる

※学校統合について、「子どもにとってよいこと」とする一方、「地域にとっては寂しくなる」などの感情的なものが多い

③中学校が統合しなかった後の黒川地区はどうかと思う

- ⑩ 地域ならではの学習が続けられる ⑩ 通学は今までどおり楽である
- ⑩ 学校の老朽化に対応できないのではないか
- ⑨ 子育て世代の移住者が増え活性化する
- ⑨ いっそう少人数になり学校や生徒に活気がなくなる

※学校統合しないことは、子どもや地域にとって現状維持ができるという意見が多いが、子どもにとってよくないとする意見も見られる

③令和9年4月からの中学校の統合については？

- ⑩ 統合はまだ早く、どうしたら統合せずにいけるのか考えたい
- ⑩ 地域の人や子どもたちが喜ぶような新しい校舎で学ぶことができよい
- ⑨ 統合はまだ早く、黒川地区で小中一貫校をつくるべきだ
- ⑨ 大人数の中での生活ができよい

そのほかの地区



○開催日、開催地区、参加人数 出席者合計…37人

1月18日（木） 学校建設近隣住民（町民会館） 出席者…6人

1月27日（土） 蘇原地区（蘇原ふれあいセンター） 出席者…9人

2月3日（土） 佐見地区（佐見ふれあいセンター） 出席者…9人

2月10日（土） 白川地区（町民会館） 出席者…5人

2月17日（土） 白北地区（白北ふれあいセンター） 出席者…8人

○教育委員会から、学校統合、校舎建設、それに伴って変わる通学、スポーツ、教育課程などについて説明し、さらに、その地域ならではの課題について取上げた

○主な質問・意見の内容

（白川中近隣住民）

- ・施設一体型小・中学校建設の進捗状況及び今後の予定について
- ・施設一体型小・中学校新校舎の構造、屋根形状について
- ・工事期間中の近隣民家への環境対策等について

（各地区）

- ・施設一体型小・中学校建設の内容（工期ごとの工事概要、解体工事）について
- ・再編後の児童・生徒数の推移（見通し）について
- ・教員等の配置と指導体制について
- ・通学支援の見直しについて（スクールバス通学、自転車購入補助など）
- ・学校と地域の関わり（部活動の地域移行を含めた）について
- ・人口減少問題等とまちづくり（移住政策・廃校の利用等）について 等

施設一体型小・中学校建設に向けた活動状況

施設一体型小・中学校建設 基本計画の策定及び基本設計

基本計画策定及び基本設計業務公募型プロポーザルの実施

- ・一次審査 5月2日(火)
書類審査により応募のあった8者のうち5者を二次審査の対象として選定
- ・二次審査 6月22日(木)
プレゼンテーションと、ヒアリングにより以下のとおり受注候補者を選定
- ・受注候補者として選定した者
大建設株式会社(岐阜市)
※最近の実績として、長良小学校、笠原小中学校などを設計
※本町では、白川中学校大規模改修(平成元年～4年実施)、佐見中学校屋内運動場(平成3年2月竣工)、白川学校給食センター(平成7年3月竣工)などを設計

基本計画策定及び基本設計業務委託契約の締結

- 契約期間 令和5年9月20日～令和6年5月31日
- 契約金額 37,829,000円

基本計画策定及び基本設計業務の推進

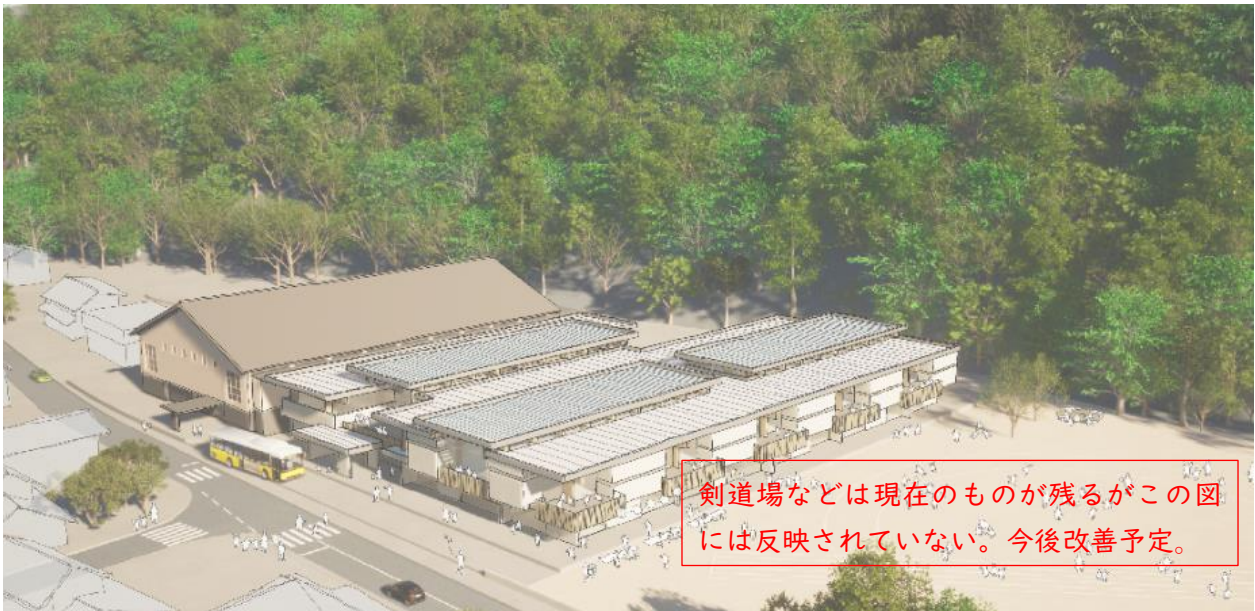
- ・岐阜大学教職大学院名誉教授 石川英志先生、名古屋大学大学院教授 小松尚先生に加わっていただきながら、令和5年度は21回の検討会(前述した「新しい学校づくり検討委員会」を含む)を実施し、十分に調査、検討を実施し、業務を推進

基本計画策定及び基本設計の概要

基本設計のポイント

○基本設計で具現すべきテーマ

- ① 小中一貫教育の実施に適合し時代を超えて使い続けられる教育施設
- ② 安心・安全でだれもが使いやすいインクルーシブな学校
- ③ 自然や周辺環境に調和し、ライフサイクルコストに配慮した学校



白川町の新しい小中一貫教育に適合し、将来の児童生徒数の推移に対して柔軟に対応できる校舎とする。また、児童生徒一人一人の個性を伸ばし、多様な学習形態や交流活動を可能にするとともに、時代の変化にも柔軟に対応できる施設とし、他用途との兼用も見据えた可変性のある施設づくりを行う。

特に「読書のまち」白川を象徴する図書スペースは、児童生徒の学習の場としての「ライブラリー」であると共に、外部に向けての発信・発表の場としての「ミュージアム」にもなり、日常的に地域住民との交流が生まれるような、白川らしい活気あふれる空間づくりを行う。

児童生徒が1日の多くを過ごす教室は自然光を十分に確保できる2階にまとめ、全学年が共有して使える大きな学びのスペースを設けることで、教室以外でも個に対応できる様々な学習の場を提供し、自主的学習と活発な異年齢交流が生まれる校舎を計画。

